P－77

地域課題に対する学生の学びとその学習効果に関する基礎的研究―新潟水俣病患者の聞き取り調査から―

大坪美香[1)]、渡邉敏文[2)]
1) 2)新潟医療福祉大学 社会福祉学科

【背景・目的】 新潟医療福祉大学社会福祉学科では、新潟水俣病関連情報発信事業として、多様な新潟水俣病患者支援を行っている。新潟水俣病患者からの聞き取り調査は、その一環として2018年度に新たな取り組みとして始めたもので、患者の主観的事実を聞き取り、「語り」の記録化を行った。具体的には、①阿賀野川との関り、昔と今とでの変化、②水俣病に罹患した原因をどのように考えているか、③水俣病の症状とその中で一番辛い症状、④神様への願いごと、⑤学生や将来を担う子どもたちに伝えておきたいこと、を質問項目として、生の声を記録として残した。

この調査は、「二度と同じ過ちを犯してはならない」という水俣病患者から、後世へのメッセージを発信していくための重要な取り組みである。加えて、学生がこの実践活動をとおして、感じたこと・考えたことをまとめていくことは、現在そして未来へと、水俣病問題の情報を発信する上で貴重であり、地域政策の普遍化にも繋がると考える[1)]。

これらの背景を踏まえ、地域課題に対する学生の学びとその効果について検証する基盤としたい。

【方法】「新潟水俣病阿賀野患者会」に対して調査の目的を事前に説明し承諾を得た上で、患者5人に聞き取り調査を行った。聞き取った学生は、新潟医療福祉大学社会福祉学科3年生4人、4年生2人で、患者1人に対して学生2人が60分間の聞き取りをおこなった。2018年11月15日に、「新潟県立環境と人間のふれあい館」で実施した。そして、学生にこの調査から学生が感じたこと・思ったことを記載してもらい、整理・考察を行った。

【結果】 聞き取り調査の結果は表1に、学生が聞き取り調査を行って感じたこと・思ったことは表2に示した。

表1 新潟水俣病患者からの聞き取り調査結果

質問項目	患者からの聞き取り内容（一部抜粋）
仕事や日常生活における阿賀野川との関わり、昔と今での変化	「川の水なんて、飲み水でしたもん。夏場みんな泳ぎに行くじゃないですか、だいたいみんなのんでましたから」「うちらの育った川はものすごい綺麗で、今と違ってものすごい綺麗でした」
水俣病の症状に罹患した原因をどのように考えていますか	「これはやっぱり、魚を食べたことが原因なんですよ」「水俣病になってね、誰を恨むとか、そういのはありません」
水俣病の症状で一番つらい症状はなにか	「頭の中に蝉が何十匹もいるような感じ、やかましい騒音の中にね、工場の中にいるようなガラガラするような感じ」「ラーメンに入ってレンゲでスープが飲めない、ひどいときは全然もう、殆ど不可能です」
水俣病の治療はうけていますか	「何もしていない、薬もないし、治療する薬もない」「痛いときは痛み止めをのんで誤魔化すっていう感じです」
神様への願い事	「公害のない国になってもらいたい、この病気を治す研究をもっとしていただきたい。自分の体が健康になることです」
学生や将来を担う子どもたちに伝えておきたいこと	「いったん壊したものは100年経ってもなおらない」「若い人たちにはもっとコミュニケーションをとってほしい。会話が一番ですからね」「どこの病院に行っても結局『年のせいですよ』と言われるんですね」

表2 学生が感じたこと・思ったこと

学生が聞き取り調査を行って感じたこと・思ったこと
○患者一人一人の思いをくみ取ることができた
○興味をもたない、知らないことが恐ろしいと感じた
○水俣病問題を知ることが大事である
○知ることで深く考えることができた
○患者の背景を知ることで、どのような思いで病気と向き合ってきたのか考えることができた
○患者からのつらい・悲しいという思いだけを聞くのではなく、その思いを引き継いで同じ過ちを犯してはいけないと思った
○自分たちが聞き取ったことを、後世につたえていかなければならないと思った
○公害の恐ろしさだけでなく阿賀野川やその魅力をもっと発信していく必要がある
○患者の生の声を聞き理解することが大事である
○一人の声でも十分に大きな意味を持つと感じた
○解決したい思いとして、水俣病・差別の偏見・自然破壊などがあるが、生活が破壊されることで、誰かの生活が便利になるという社会の仕組みを変えていくことが大切である

【考察】 学生は、聞き取り調査をとおして、新潟水俣病患者という概念を問い直し、問題の表層だけでなく患者がどのような思いで病気と向き合い、今後どのように生きていきたいのかという、患者の思いの背景を考えることができている。また、興味を持たない・知らないことが危惧され、一人ひとりの声に耳を傾け、理解することの大切さを学んでいる。さらに、環境に目を向け公害について問題を提起し、自分たちにできることはなにか、水俣病をとおして、広い視点から課題を見つけることができている。

今回の調査をとおして、患者からの声を聞き、学生自身が自分たちにできることについて考え、真剣に向き合うことができたと思われる。

【結論】 今回、実施した聞き取り調査では、水俣病患者の生の声を学生が聞き取ることで、講義では得られない体験的な学びと主体的に考え行動に移すことができる学習効果が期待できた。今後は、この結果をもとに、地域課題に対する学生の学びとその学習効果に関して、研究のさらなる基盤を構築していきたい。また、患者の主観的事実を聞き取った「語り」の記録化をどのように残していくのかを検討し、そのプロセスをとおして学生がどのように学びを深めていくのかを探求していきたい。

【文献】

1) 渡邉敏文他：地域における学生の体験型学習とその効果に関する研究，新潟医療福祉大学平成22年度学内奨励金学長裁量研究費報告書，2011.